作業療法士 × アート　広がる地域の可能性

古川 絵美(ふるかわ えみ)　綾部市立病院
イシワタ マリ　山山アートセンター

近年，作業療法士の職域は医療の枠を超え，地域ケアや生活の場へと広がっており，対象者も多様な疾患，症状，背景を有している．そんな中，新型コロナウイルスの感染拡大により社会が一変し，多くの人が作業機能障害を経験したのではないだろうか．この事態の中でも，対象者に対し「作業的存在である人の健康や幸福に寄与する」という作業療法の本質は変わらないものの，課題解決に向けての選択肢が狭まっているように感じる．このような人や環境の変化をどのように捉え，対応していくべきなのかが問われている．

そこで，様々な問題を解決していくためには，「多様性」の要素が必要だと考える．私が考える「多様性」とは，領域を超え，自分とは違うバックグラウンドを持つ人々と関わり，自分を相対化する体験を積み，別の思考を取り入れていくことと解釈している．

今回，美術家のイシワタマリ氏と「０Ｔ × アート ～広がる地域の可能性～」というテーマで対談を行った．イシワタ氏とは２年前に出会い，イシワタ氏が代表を務める山山アートセンター主催の「よりあいみたけサロン（高齢者サロン)」の活動に参加させてもらうことになった．活動を通して，私の「思考」との違いを感じた．圧倒的に違いを感じたのは，自ら「問い」をつくり出す力である．私は課題解決型の思考になりやすいのに対して，イシワタ氏は「そもそも何が課題なのか」という問題をつくり出し，「何が問題なのか」という問いから始めていることである．私の中で常識化していることに対して，「本当にそれは必要なのか？」「そもそも〇〇とは？」などと問われることがある．その問いがあったおかげで，思考過程を再考することができる．

さてここで，アートと聞いて皆様はどのようなことを想像されるだろうか．色々な意味が考えられる中で，私が注目したいのは，「思考」の部分である．秋元は，アートが示唆するものはある種の哲学であり，自ら問いを立て，考えるという思考のプロセスであると述べている．この思考こそ，「多様性」を考えていくうえで必要不可欠なものであると考える．専門家として，知識・技術を身につける一方で，異なった見方を受け容れ，謙虚に学んでいくことが視野を広げる機会であり，必要な視点だと感じる．

以上を踏まえ，①０Ｔとアートが出会うきっかけ ②お互いの作品（AtoZ)・山山アートセンターの活動について ③これからの地域の居場所作りについて，対談を通してアートの考えについて触れていただく機会としたい．

略　歴

古川絵美／作業療法士

1986 年京都府生まれ，福知山市在住．2008 年関西学研医療福祉学院作業療法学科を卒業．同年，洛和会音羽病院リハビリテーション部に入職．2012 年同法人内の整形外来専門である音羽前田クリニックに異動．2015 年綾部市立病院リハビリテーション科に入職．医療現場で働く傍ら，セラピストが学び合い，繋がる場の企画・運営に携わる．2017 年より綾部市認知症初期集中支援チームの活動を機に，「認知症があろうがなかろうが，自分らしく住み続けられる地域づくり」をテーマに，認知症の認識調査研究や京都府作業療法士協会認知症支援推進部での活動，市民向けイベントの企画・運営，山山アートセンターの高齢者サロン活動に携わる．

イシワタマリ／山山アートセンター代表，美術家．

1983 年横浜生まれ，京都府福知山市在住．慶應義塾大学で「スピリチュアリティにまつわる社会学」を学んだのち，2007 年から 2009 年までスペイン北部バスクやベルリンで絵画やパフォーマンス作品の創作活動を行う．2015 年に「さまざまな人が力を持ち寄ってとにかく生きようとするプロジェクト，山山アートセンター」を立ち上げ．「アート」「福祉」「医療」「農業」・・・などさまざまな領域が交差する環境づくりを模索している．

山山アートセンター
http://yamayama-art.com/